

# 公害被害風化防げ

## 学生ら「土呂久」の実態学ぶ

宮崎・高千穂

宮崎県高千穂町にあった土呂久鉱山から、住民や労働者にヒ素中毒症の被害が広がった「土呂久公害」の実態を学ぼうと、「土呂久を学ぶフィールドワーク」が12、13日に同町土呂久地区であった。



土呂久鉱山周辺の地図などを示して学生に被害の実態を話す佐藤さん

1920～62年に操業した土呂久鉱山では、農薬の原料用などに亜ヒ酸を製造していたが、ヒ素を含んだ有害物質が漏れた他、鉱石を焼く際に出た煙を吸った住民や労働者が症状を訴えた。

73年に公害病に指定され、今年10月末現在で認定患者は215人になるが、生存者は42人で平均年齢も83歳と高齢化が進む。そのため次世代に教訓を伝えようと、県が2017年度に環境教育の一環として始めた。

12日には、南九州大（同県都城市）の学生

10人が参加。旧鉱山周辺や被害者の墓などを巡り、慢性ヒ素中毒症で父親らを亡くした佐藤慎市さん(70)が「自分のことのように考えて、二度と悲惨な公害が起きないようにして」と呼び掛けた。

参加した同大学4年の市川孝祐さん(21)は「墓碑に『生きとせご

ざいます」と刻まれていたのを見て胸が痛んだ。命を奪う公害を多くの人の努力で防がなければ」と話した。

【重春次男】